

Good Death の規定因子に関して

升川 研人*

サマリー

望ましい死の達成度尺度 GDI (Good Death Inventory) は わが国の遺族調査で用いられる評価尺度の 1 つである。短縮版 GDI の全 18 項目の合計得点、コアドメイン 10 項目の合計得点、そして、望ましい死の達成度を評価する際に重要視した項目に限定した評価でどの

程度全般的な Good Death を評価することができているのかを比較した。GDI 項目で評価する際には、コアドメインや重要視した項目に限定せず全 18 項目の合計得点が適しているということが明らかになった。

目 的

緩和ケアの重要アウトカムである Good Death (望ましい最期) の達成度を評価するために、わが国では、宮下らによって望ましい死の達成度尺度 Good Death Inventory (以下、GDI) が開発された¹⁾。GDI は日本人を対象とした質的研究と量的研究から抽出された Good Death の構成概念をもとに構成されている。GDI 短縮版は「からだや心のつらさが和らげられていること」、「望んだ場所で過ごすこと」など多くの人が共通して重要だと考える 10 の概念 (コアドメイン) に加えて、「できるだけ治療を受けること」、「自然なかたちで過ごせること」など人によっては異なるが重要であると考えられる 8 の概念 (オプションドメイン) からなる。それぞれの項目に関して、

「全くそう思わない」から「非常にそう思う」の 7 段階で評価し、18 項目の合計点を算出する。そして、その合計点が高いほど評価が高いということを示している。

GDI は緩和ケアのアウトカム評価尺度としてわが国で長年継続的に使用されており、近年では韓国語版、中国語版も開発され、アジア圏における緩和ケアのアウトカムの評価において重要な役割を果たすことが期待される^{2,3)}。

しかし、わが国の遺族調査において問題点が指摘されている。その 1 つが「アンケート回答に対する負担感」である⁴⁾。その問題点を解決する 1 つの方法が使用する評価尺度の簡易化であると考え、我々は遺族調査における遺族の負担感軽減のための第 1 段階として、評価尺度の 1 つである GDI の短縮化の可能性に関して取り組むことと

*東北大学大学院 医学系研究科

した。GDI の短縮化可能性を検証するため、GDI 短縮版の全 18 項目の合計得点とコアドメイン 10 項目の合計得点評価能との比較と、また、望ましい死の達成度を評価する際に重要視した項目に限定した評価に関して検討することとした。

結 果

1) 対象者・有効回答率

本研究の質問項目は J-HOPE4 研究全対象者に対して配布された。有効回答率は 9,071（有効回答率 53%）であった。

2) コアドメイン 10 項目の合計得点の評価能に関して

評価能の比較をするために、先行研究で使用された「全般的 Good Death 評価」との相関係数を算出した。全般的 Good Death 評価に関しては、先行研究を参考に、「あなたは、全般的にみて患

者様が望ましい最期を迎えることができたと思いますか？」を使用した。「迎えることができた」とまったく思わない」～「迎えることができたと思う」の 11 件法で尋ね、得点が高いほど全般的 Good Death の到達度が高いことを示す。

GDI 短縮版 18 項目の合計点と全般的 Good Death 評価間のスピアマンの順位相関係数は 0.69（ $p < 0.001$ ）であった。コアドメイン 10 項目の合計点と全般的 Good Death 評価間のスピアマンの順位相関係数が 0.66 であった。各項目別にみると、「自然に近い形で過ごせた」と全般的 Good Death との相関が最も強く 0.61 であった。追加解析として、患者背景ごとに GDI 短縮版全 18 項目の合計点と全般的 Good Death 評価との相関係数を算出した。その結果、すべての背景要因で $p = 0.65 \sim 0.79$ （いずれも $p < 0.001$ ）の範囲であることがわかった（表 1）。

表 1 全般的 Good Death 評価との相関関係

GDI 項目	相関係数 *	p 値
痛みが少なく過ごせた	0.38	<0.001
からだの苦痛が少なく過ごせた	0.42	<0.001
おだやかな気持ちで過ごせた	0.54	<0.001
望んだ場所で過ごせた	0.50	<0.001
楽しみになるようなことがあった	0.42	<0.001
医師を信頼していた	0.40	<0.001
人に迷惑をかけてつらいと感じていた	0.09	<0.001
ご家族やご友人と十分に時間を過ごせた	0.41	<0.001
身の回りのことはたいい自分でできた	0.12	<0.001
落ち着いた環境で過ごせた	0.51	<0.001
ひととして大切にされていた	0.38	<0.001
人生をまっとうしたと感じていた	0.54	<0.001
納得がいくまで治療を受けられた	0.54	<0.001
自然に近いかたちで過ごせた	0.60	<0.001
大切な人に伝えたいことを伝えられた	0.45	<0.001
先ざきに起こることを詳しく知っていた	0.25	<0.001
病気や死を意識せずに過ごせた	0.39	<0.001
他人に弱った姿をみせてつらいと感じていた	0.16	<0.001
生きていることに価値を感じられた	0.27	<0.001
信仰に支えられていた	0.15	<0.001
GDI 短縮版全 18 項目合計得点	0.69	<0.001
GDI コアドメイン 10 項目合計得点	0.66	<0.001

* スピアマンの順位相関係数

3) 望ましい死の達成度を評価する際に重要視した項目に限定した評価に関して

全般的な望ましい死の達成度を評価する際に重要とした GDI 項目を表 2 に示す。40～49% のがん患者遺族が「おだやかな気持ちで過ごせた」「からだの苦痛が少なく過ごせた」「痛みが少なく過ごせた」の心身の苦痛緩和に関連する項目を重要視したと回答した。次いで、「ご家族やご友人と十分に時間を過ごせた」が 34% であった。最も重要視した項目の得点と全般的 Good Death 評価間の相関係数は 0.52 であった。また、重要視した項目の合計得点と全般的 Good Death 評価間の相関係数は 0.47 だった (表 3)。

考 察

本研究で最も重要な知見は、望ましい死の達成度を GDI 項目で評価する際にはコアドメインや重要視した項目に限定しない、全 18 項目の合計得点が適しているということである。GDI 短縮版全 18 項目の合計得点と全般的 Good Death 評価の相関係数は 0.69 であった。中国語版では全般的 Good Death 評価との相関係数は 0.44 であり、また韓国語版では 0.55 であった^{2,3)}。これらの結果から、GDI の 18 項目の合計得点は日本におけるがん患者の Good Death を良く捉えているといえるのかもしれない。しかしながら、Good Death 評価は膨大な要因からの影響を受けるとい

表 2 全般的 Good Death 評価時に重要視した GDI 項目

GDI 項目	度数	%
おだやかな気持ちで過ごせた	4,407	48.6%
からだの苦痛が少なく過ごせた	4,142	45.7%
痛みが少なく過ごせた	3,614	39.8%
ご家族やご友人と十分に時間を過ごせた	3,086	34.0%
ひととして大切にされていた	2,878	31.7%
医師を信頼していた	2,396	26.4%
落ち着いた環境で過ごせた	2,326	25.6%
望んだ場所で過ごせた	1,944	21.4%
人生をまっとうしたと感じていた	1,618	17.8%
自然に近いかたちで過ごせた	1,615	17.8%
大切な人に伝えたいことを伝えられた	1,332	14.7%
生きていることに価値を感じられた	933	10.3%
楽しみになるようなことがあった	878	9.7%
納得がいくまで治療を受けられた	856	9.4%
病気や死を意識せずに過ごせた	725	8.0%
人に迷惑をかけてつらいと感じていた	423	4.7%
先ざきに起こることを詳しく知っていた	386	4.3%
信仰に支えられていた	294	3.2%
身の回りのことはたいい自分でできた	273	3.0%
他人に弱った姿をみせてつらいと感じていた	266	2.9%

表 3 重要視した項目に対する評価と全般的 Good Death 評価との相関

	相関係数 *	ρ 値
最も重要視した GDI 項目 1 項目の得点	0.47	<0.001
重要視した項目の合計得点	0.52	<0.001

* スピアマンの順位相関係数

われているように、現時点の GDI に含まれていない側面が日本人の Good Death 評価に重要な影響を与えている可能性も考えられる。そのため、今後の研究では GDI の評価項目に含まれていないが Good Death に重要な影響を与えている項目に関する詳細な探索が必要となるかもしれない。

特に興味深い点は、全般的 Good Death 評価との相関関係を GDI 項目別にみると「自然に近い形で過ごせた」が最も全般的 Good Death 評価との相関が強かった（相関係数=0.60）ことである。そのため、日本人における Good Death を達成するための簡易的な予測因子としては「自然に近い形で過ごせた」は特に有用であるかもしれない。

まとめ

GDI を用いて望ましい死の達成度を評価する際には、可能な限りコアドメインや重要視した項目に限定せずに GDI 短縮版全 18 項目の合計得点を使用したほうが適していることが明らかになった。加えて、この評価能への患者と遺族の背景要因などの個別性の影響は大きくないことが示唆された。

文 献

- 1) Miyashita M, Morita T, Sato K, Hirai K, et al. Good death inventory : a measure for evaluating good death from the bereaved family member's perspective. *J Pain Symptom Manage*. 2008 ; 35 (5) : 486-498.
- 2) Shin DW, Choi J, Miyashita M, et al. Measuring comprehensive outcomes in palliative care : validation of the Korean version of the Good Death Inventory. *J Pain Symptom Manage*. 2011 ; 42 (4) : 632-642.
- 3) Zhao J, Wong FKY, You L, Tao H. validation of the Chinese Version of the Good Death Inventory for evaluating end-of-life care from the perspective of the bereaved family. *J Pain Symptom Manage*. 2019 ; 58 (3) : 472-480.
- 4) Miyashita M, Aoyama M, Yoshida S, et al. The distress and benefit to bereaved family members of participating in a post-bereavement survey. *Japan J Clin Oncol*. 2018 ; 48 (2) : 135-143.

〔付帯研究担当者〕

青山真帆（東北大学大学院 医学系研究科 保健学専攻 緩和ケア看護学分野）、宮下光令（東北大学大学院 医学系研究科 保健学専攻 緩和ケア看護学分野）